

目的別研究系譜図からみた 景観論の変遷に関する一考察

柴田 久¹・土肥真人²

¹学生会員 修士(工学) 東京工業大学大学院博士課程 情報理工学研究科(〒152-8552目黒区大岡山2-12-1)

²博士(農学) 東京工業大学大学院助教授 情報理工学研究科情報環境学専攻(同上)

本研究では多様化した景観研究の動向について、研究目的に着目した系譜図を導出し、景観論の変遷と今後進み得る研究の方向性について検討を行った。調査対象は1960～98年までの土木、建築、造園、都市計画分野で発表された審査付き論文492編であり、論文数の推移より動向を把握する時代区分として揺籃、初動、発展、拡充の4期を設定し、考察を行った。この結果、揺籃、初動期における景観概念の論理化と意味解釈の二重性、また拡充期に活発化したテキスト景観と景観行政制度の課題、さらに住民参加型まちづくりに向けた景観論の可能性等について明らかにした。

Key Words : landscape research, classified figure by the purpose, historical change of the issue

1. はじめに

高度経済成長期、その社会的空間的実現に不可避であった都市の拡大は、大きな利益を産出した一方で、公害等の環境問題を深刻化させた。これに反省し、人間本来の生活を直視すべく鍵として、景観や風景が重要な概念として意味を持ち始めたといえる¹⁾。本研究の最終目的は、景観がこれまで果たしてきた歴史的使命について、学術、法制度、実践の3つのレベルから明らかにすることであり、本稿ではこのうち学術について報告するものである。現在、環境共生や住民参加といった社会的制度的システムの転換が要請され、多様な発展とその領域を広げてきた景観研究の変遷を論じることは、今後の住環境整備のあり方を模索する上でも重要な資料となり得よう。一方、これまでいくつかの景観研究に対するレビュー論文がまとめられ²⁾³⁾⁴⁾、キーワードによる分類や隣接諸分野、社会的動向を含めた把握など、有用な示唆を見せている。しかし、多岐にわたる問題設定とその発展過程について、図解による総括的記述を試みたものは管見では見られない。景観論を整理し相対化させる系譜図の導出が、細分化した研究領域相互の認識を深化させる上でも、有用なものではないか⁵⁾。

本稿では以上のような問題意識から、多様化した景観研究の動向について、研究目的に着目した系譜図を導出する。さらにこれに基づき、先行研究を踏まえながら景観論の成果とその変遷について再吟味し、今

後進み得る研究の方向性について検討を試みる。

2. 研究手順

(1) 対象研究の選定と内容の整理

系譜図の作成に当たり、1960～1998年までの土木学会論文集IV、土木計画学研究・論文集、日本建築学会計画系論文報告集、日本都市計画学会学術研究論文集、ランドスケープ研究(造園雑誌)で発表された審査付き論文集より、景観に関する論文492編をタイトルのキーワード検索により選出した。検索したキーワードは「景観、風景、タウンスケープ、空間把握、スカイライン、眺望、視覚、視空間、都市デザイン、空間デザイン、デザインガイドライン、伝統的保存、保存地区、保存行政」である。なおキーワードの選定に関しては95年の日本都市計画学会『特集 景観研究と景観創造』の文献リストの作成基準⁶⁾を参考にした。ただし、視覚障害者の空間認知といった障害福祉に関する研究や、室内空間の壁面に対する色彩分析等は対象から外している。

以上の検索結果より、選出された論文を精読し①背景・目的、②対象景観、③分析方法、④結論、⑤課題、⑥参考文献(ここでは研究系譜の明確化を目的としているため主に研究の背景に記述された意義、方向性、着眼点等に直接影響を及ぼしたとされる文献を抽出し、関連、類似した既存研究の概観等については除外している)⑦その発展面・相違点等、研究内容について整理した。

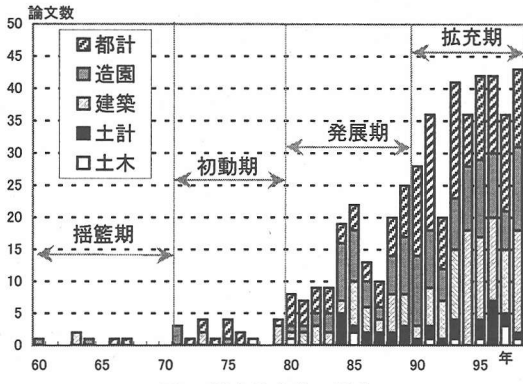


図-1 選出論文数の推移

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 1.[景観素材・資源の管理利用] | 18.[有効なデザイン手法の提示] |
| 2.[自然景観への影響把握] | 19.[景観・風景の概念追求] |
| 3.[景観保護の意味を明示] | 20.[多面的景観論の提示] |
| 4.[歴史的景観の保存] | 21.[変動要因の影響把握] |
| 5.[制度の運用に対する評価・有用性の把握] | 22.[変遷景観の特性把握] |
| 6.[動向・現状の把握] | 23.[歴史的な所の景観特性の把握] |
| 7.[事業効果の把握] | 24.[設計・計画思想史の解明] |
| 8.[評価軸の検討と方法論の確立] | 25.[植生景観の史的解明] |
| 9.[属性による評価への影響把握] | 26.[イメージ・認識構造の把握] |
| 10.[「住民」を中心とした計画づくり] | 27.[原風景・心象風景の把握・応用] |
| 11.[日常スケールでの計画づくり] | 28.[シミュレーションシステムの開発] |
| 12.[含意形成手法の検討] | 29.[視覚的効果・影響の測定] |
| 13.[調査手法における安定性の検討] | 30.[色彩の調和] |
| 14.[空間構造の把握] | 31.[眺望を確保した計画づくり] |
| 15.[地方固有要素の構造解明] | 32.[シーケンズ景観特性の把握] |
| 16.[景観構成要素と全体評価との関連性の把握] | 33.[テクスチュアへの応用] |
| 17.[景観類型の抽出] | 34.[視覚認知特性の解明] |

図-2 抽出された研究グループ

(2) 分類と系譜図の導出

選出した論文を通して、上記項目中①背景・目的によるグループ化、および⑥参考文献⑦発展面・相違点に着目した景観研究の系譜図を導出し、経年的考察と時代背景との関連性、景観研究の学術的成果について明らかにする。①に着目した理由は、系統的な研究動向を最も反映させていること、また研究者がもつ問題意識を浮かび上がらせることで、景観に対する論点を明確にできると考えたためである。

さらに系譜図における研究グループの推移と相互の関係性から、景観論の変遷について総括的考察を行い、今後の方向性、発展領域について言及する。

3. 目的別研究系譜図の導出と研究の動向

(1) 時代区分と研究目的によるグループ化

選出された景観研究について論文数の推移を示す【図-1】。60～70年にかけては、年によって1,2編見られる程度で、土木系では発表がなされていない。71～79年に、各4編以内ではあるがほぼ毎年発表されるようになり、以降徐々に増加傾向を示している。85年に第1のピークを迎え、90年、91年と都市計画分野での発表が増加している。91年に初めて総計で35編を越え、92年に再度減少に転じているものの、その後は36～42編程の安定した発表が行われている。以上の推移結果と先行研究²⁾⁴⁾を踏まえ、本研究では1960～70年を揺籃期、71～79年を初動期、80～89年を発展期、90～98年を拡充期とし、これら4期を動向把握のための時代区分として設定した。

次に対象論文の目的を吟味し抽出された、34の研究グループを示す【図-2】。研究グループの内容の詳細については以降の考察で示すが、本稿ではこれらの研究グループを並置し、系譜について考察する。

(2) 景観論の変遷

設定した4つの時代区分に基づいて、導出した系譜図について考察を行う。なお揺籃期、初動期については研究論文数が少ないため2区分を通して考察し、発展期、拡充期については論文数が多いため、紙面の都合上系譜図等を一部割愛し考察を行う。

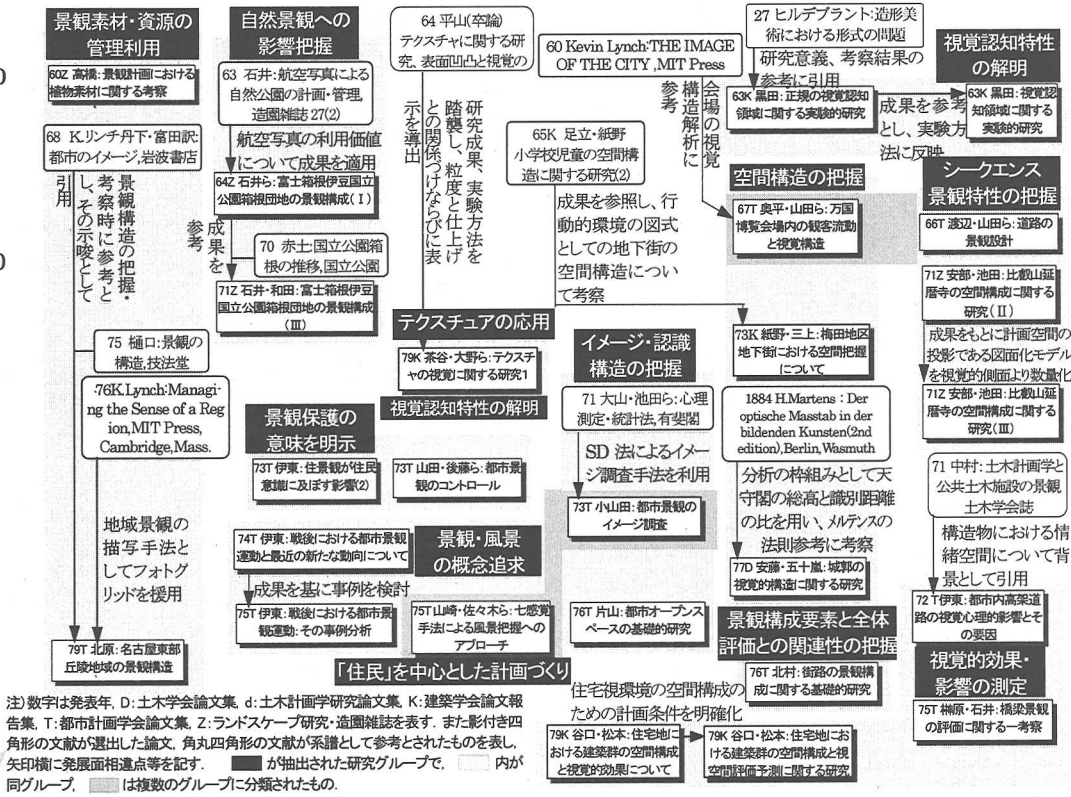
a) 揺籃期・初動期【図-3】

まず、都市開発における自然要素導入の意義や、景観を構造化し開発の前提となる自然要素を資源として位置づけようとした「景観素材・資源の管理利用」研究⁷⁾⁸⁾が早くから行われている。不良環境下での植物素材の繁殖性やフォトグリッドを援用した自然景観単位の抽出など、計画手法としての有用性について言及がなされている。また、国立公園内の自然景観の推移より、開発の影響とその限界を客観的に明示しようとした「自然景観への影響把握」⁹⁾¹⁰⁾も論じられている。これら2つの研究グループは50年代に主流であった自然景観に対する厳正保護の立場から、当時の産業開発の進行と余暇利用問題に対して、自然景観の管理と利用を、特に造園学的に理論づけようとしたものといえる¹¹⁾。

次に、環境保護を訴えた住民市民運動が盛んであった73年から75年にかけて、運動の発展過程の史的考察や市民に対する意識調査を事例に「景観保護の意味を明示」する研究¹²⁾¹³⁾や、「景観・風景の概念追求」を行った研究^{14)～16)}が見られる。概念追求の研究は何れも、住民との衝突を背景とした都市計画の混乱を解決する方法論として提示している。これらは景観概念の社会的・論理的構造の分析であると同時に、景観研究の意義を都市計画分野に位置づけたものといえよう。

一方、事業の設計・計画のための指針獲得を第一目的とした研究が同時に行われ、操作性の高い視覚領域を中心とした実験研究が多く見られる。造形美術論に科学的根拠を与えようとした研究¹⁷⁾¹⁸⁾や、70年後半から80年代初頭にかけて本格的に成果の見られる「テクス

60
70



注) 数字は発表年。D: 土木学会論文集。d: 土木計画学研究論文集。K: 建築学会論文報告書。T: 都市計画学会論文集。Z: ランドスケープ研究・造園雑誌を表す。また影付き四角形の文献から選出した論文。角丸四角形の文献が系譜として参考とされたものを表し、矢印印に発展面相違点を記す。■が抽出された研究グループで、□が内が同グループ。■は複数のグループに分類されたもの。

図-3 揺籃期・初期

チュアの応用¹⁹⁾など、[視覚認知特性の解明]がなされている。これらは、客体としての景観に対し、主体とする人間の視野、視力といった身体的特性に着目した、最も基本的な景観解析法を提示している。さらに当時の高度経済成長に対応し、社会資本整備に関する視覚的観点から検討した研究が数多く行われている。道路のルート選定や博覧会会場における観客流動の構造認識等を目的とした「シーケンス景観特性の把握」^{20)~22)}や、道路や橋梁といった土木構造物、住宅群の[視覚的効果・影響の測定]^{23)~26)}も論じられている。これらは設計を支援する資料的価値として有用であったが、研究上の課題に共通してあげられているように、実験による研究成果が設計・計画の実践にどこまで対応できるかといった、検証の段階にまでは踏み込まれていない。次に、地下街の防災計画を企図したものや日本文化を象徴する城郭景観の特質を探った[空間構造の把握]^{27)~29)}研究が見られる。対象とする空間の分析に、視覚・認知心理学の知見を援用したものが多く、視覚に基づいた分析スタイルから、景観を心理現象として解釈する立場性が看取される。同様に、景観を心的に捉えようとする[イメージ・認識構造の把握]研究³⁰⁾³¹⁾も73年より出現する。これらはいずれも57年に「スグット」によって考案されたSD法が調査方法として用い

られており、認知心理学の成果が景観研究に有用であることが、この頃より認められていった。最後に、景観の現象構造と評価との相関を考察した[景観構成要素と全体評価との関連性の把握]³²⁾が行われ、ここでもスライド実験調査による計量心理学的手法が分析方法として採用されている。景観に対する複数の人々の主観的評価を、定量化し処理することで評価軸の安定性、客観性をできるだけ担保させようとするねらいがあったといえる¹¹⁾。

b) 発展期

まず、前述した[自然景観への影響把握]を目的とした同研究として、ダム、高速道路といった大規模土木構造物が及ぼす景観改変について検討がなされ、予測手法としての方法論的提案を行ったものが多い^{33)~36)}。一方、80年に歴史的保存地区画定に至る客観的指標の抽出や³⁷⁾、89年の文化財指定庭園の中高層ビルによる景観破壊の実態把握³⁸⁾など、[歴史的景観の保存]を提言する研究が見られる。都市環境整備による伝統的文化的地域の危機的状況を明らかにし、保全策考案のための基礎資料として研究成果を位置づけている。さらに、古典的庭園、江戸や近世大阪といった、いわゆる名所と呼ばれるまちの景観構造を分析する[歴史的な所の景観特性の把握]^{39)~44)}や、景観[設計・計画思

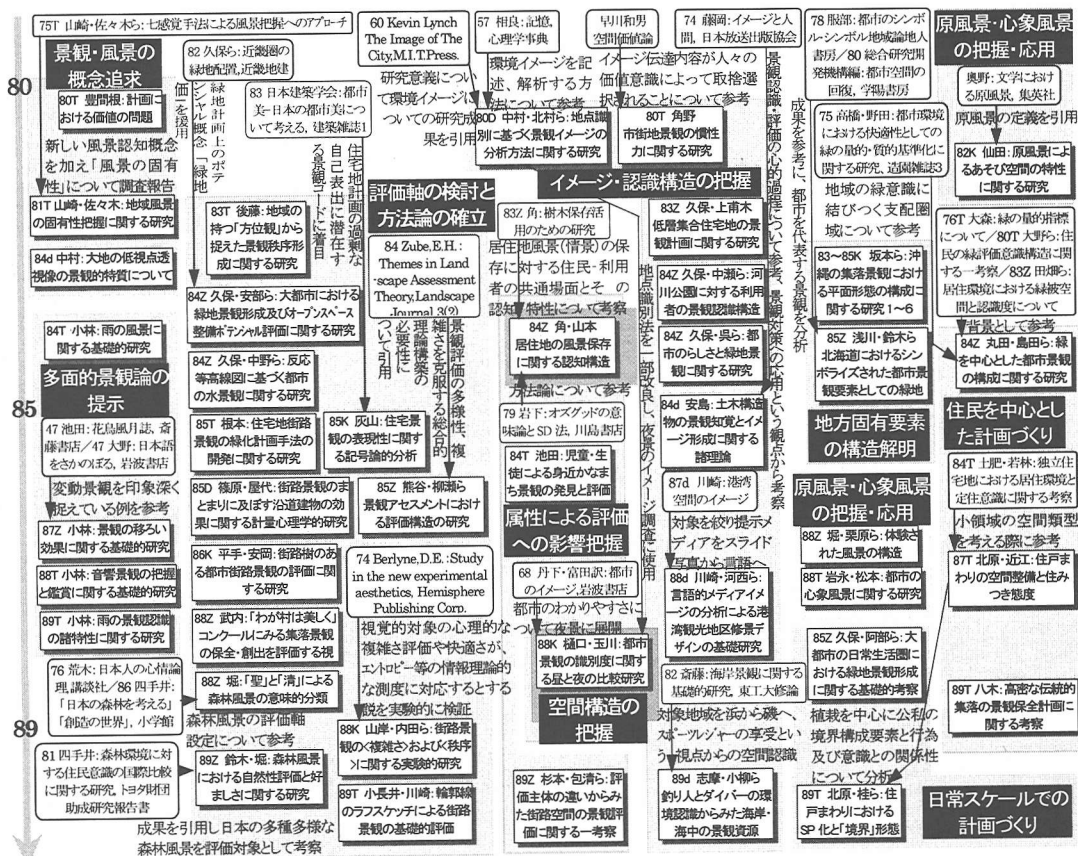


図-4 発展期 I

想史の解明]を目的とした研究^{45)~48)}が82年頃より行われ始める。歴史的観点から現代の景観設計・計画理論のヒントを得ようとする流れが、この頃より定着していく。次に、70年後半から本格化した景観施策活動状況を受け[制度の運用に対する評価・有効性の把握]^{49)~53)}、[事業効果の把握]⁵⁴⁾が85年から89年にかけて行われている。制度策定や整備事業が当該地域の景観に与えた影響等について事例より詳細に考察しているが、都市型景観条例の先進都市、神戸市を対象としたものが大半である。

次に、80, 81年と[景観・風景の概念追求]を目的とした原論的研究が行われ、風景の固有性や客観的合理的とされる建設行為の矛盾が論議されている⁵⁵⁾⁵⁶⁾【図-4】。これらの研究では分析アプローチは違うものの、近代の都市化に伴う計画技術の思想的問題を示唆し、共通して風景の価値喪失について言及している。さらに84年には、景観が大地の視覚像を核としたイメージ現象であるとし、その透視像の特質を景観計画上の示唆として提示したのものもある⁵⁷⁾。ここには初動期で見られた概念追求の研究から一歩進み、仮説の検証過程を方法論として提示する展開が見られる。84年には景観解釈の幅について言及した[多面的景観論の

提示]^{58)~61)}が見られ、天候等による景観の変動、聴覚による景観体験が論じられている【図-4】。また、長時間経過した後の景観の変化を扱った[変遷景観の特性把握]⁶²⁾⁶³⁾も行われ、人間の視覚認知にこだわった多くの論考に対し、5感による総合的景観現象の把握が論じられている。

83年から86年にかけては、景観の「評価」に関する研究が盛んに行われ、[評価軸の検討と方法論の確立]、さらに年齢差や利用者か否かといった人の[属性による評価への影響把握]⁶⁴⁾⁶⁵⁾が検討されている【図-4】。ここでの評価軸は多岐にわたるが、秩序形成に関する「まどまり」を目的としたもの^{66)~68)}、さらに緑化に関する指標が多い^{69)~71)}。80年初頭からの緑化推進、景観施策、モデル事業の増加が背景として挙げられるが、これら研究の多くに心理実験結果を用いた定量的アプローチが採用され、景観に対する客観的評価指標を希求していた動向が窺い知れる。また、視覚情報から心的な総体として景観を論じ、その認識構造を探る[イメージ・認識構造の把握]研究も行われ、対象景観に対する直接的イメージ調査報告の色合いが強かった初動期に比べ、より認知心理学的な景観現象の構造解明に主眼が移っている【図-4】。これらは、評価に關

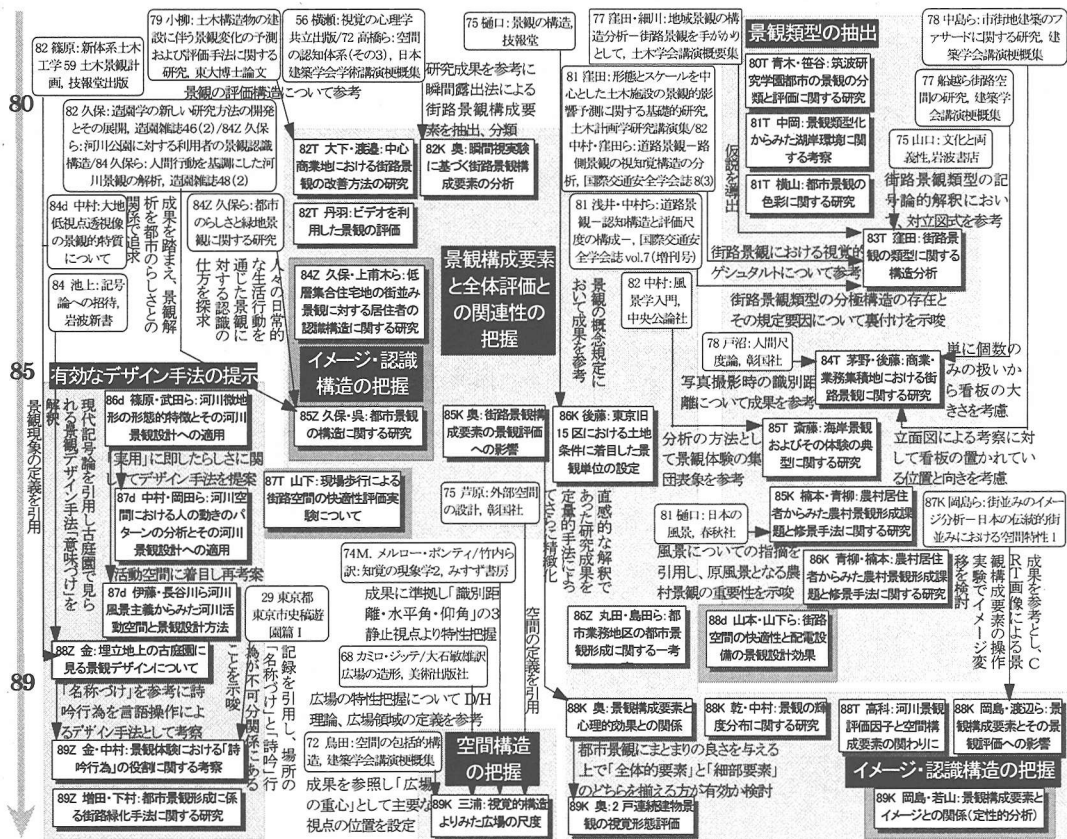


図-5 発展期 II

する研究と同様、視覚的刺激による心理実験を用いたイメージの計量化が多く、80年代前半では、現存する場の認識構造を把握したものが多い。しかし、後半においては実験ではなく小説やガイドブック等、言語をテキストとした解説作業による説明⁷²⁾⁷³⁾といったアプローチの多様化が進む。一方82、88年と、経験的情報によって形成された「原風景・心象風景の把握・応用」を目的とした研究が見られ始め、子供の良い遊び環境の条件⁷⁴⁾や、風景の見せ方を演出する空間操作等、計画の基礎資料を得ようとしている⁷⁵⁾⁷⁶⁾【図-4】。84年からは「住民」を中心とした計画づくりを目的とした研究も見られ始め、住民参加論の前段として日常生活における認識より、景観整備上、住民に役割分担される空間の検討を行っている⁷⁷⁾【図-4】。これらは、景観計画の方針・指針を住民の生活空間に対する認識より設定しようとしているが、計画における住民との対話、合意形成といった論点はここには見られない。さらにこれと近似した「日常スケールでの計画づくり」では、日常生活者の行為、意識を基調とした景観へのアプローチが行われており、分析領域の限定により空間形態の詳述化がなされている⁷⁸⁾⁷⁹⁾。83~85年にかけては、景観に関する地方の代表性について言及した「地方固

有要素の構造説明」を目的とした研究も行われている^{80)~86)}【図-4】。

次に、84年から景観予測を論じた「シミュレーションシステムの開発」が行われ、モデルスケープやカーコンピュータグラフィックスの実用化^{87)~89)}等についてその有効性の検証とともに進められている。これらはコンピュータ技術の高度化が背景としてあげられるが、操作性、写実性、経済性等の問題から、実務レベルでは依然として利用困難な状況であったといえる。一方、初動期に多く見られた「視覚的效果・影響の測定」が84年まで活発に論じられている^{90)~94)}。自然景観と大規模建造物を対置した図式は初動期とほぼ同じだが、眺望権訴訟や反対運動が背景に記述され、より社会性を帯びたものとして研究意義を主張している。また、視覚的效果をポジティブに捉え、計画論的に位置づけようとした「眺望を確保した計画づくり」が84~87年にかけて行われている^{95)~97)}。研究背景として都市環境の変容が記述され、景観計画によって無機質な街中に精神的うるおいをもたらす場所の実現を企図している。また、物理的な媒体と違い、明確に観測しづらい景観現象をいかなる方法で把握するかを念頭に置いた「調査手法における安定性の検討」研究^{98)~103)}が85年から見られ始める。

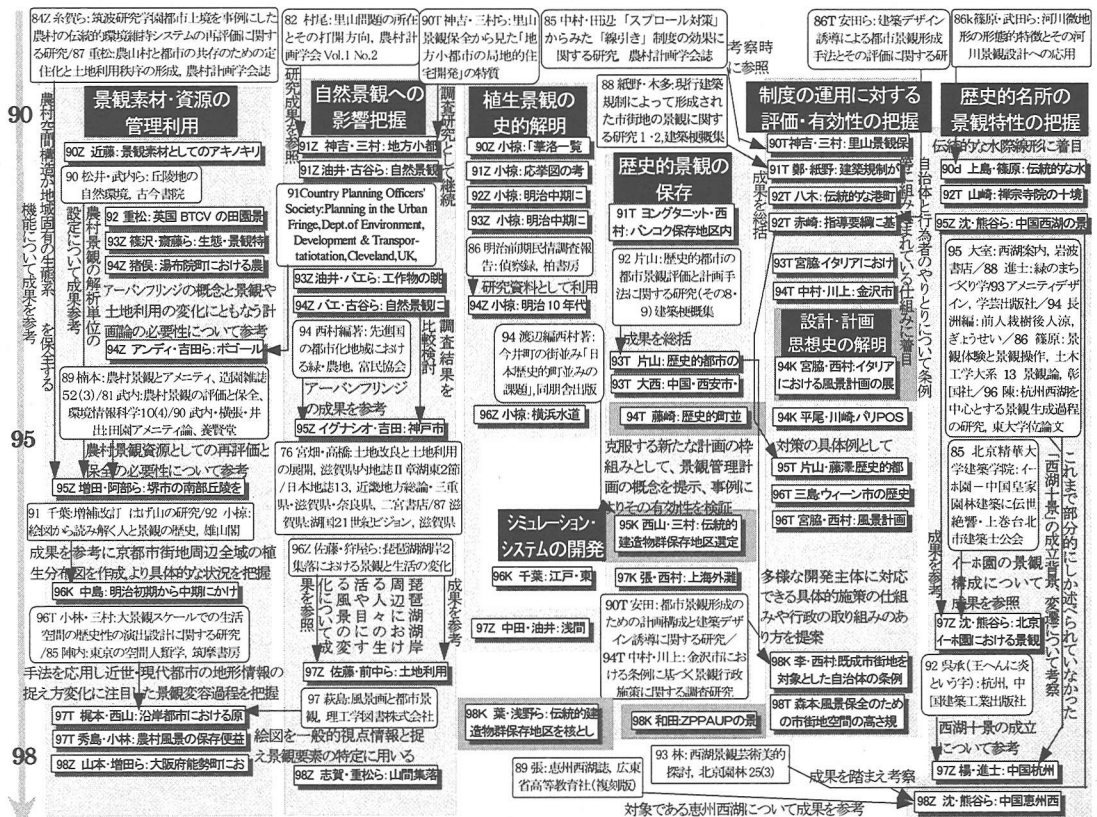


図-6 拡充期 I

景観計画の実践、研究活動の増加に伴い、採用する分析手法の基礎資料として提示しようとするものが多い。

次に「景観構成要素と全体評価との関連性の把握」、いわゆる風景の見え方の指標化がテーマとして確立し、前述した景観の評価に関する研究と同様、その多くが定量的解明を行っている【図-5】。多種多様な景観要素群の分析に、多変量解析法の有効性が合致し、さらに景観整備事業の増加など、操作論的研究に要請が高まったことが大きな要因といえる。対象としては街路景観が最も多く、スライド評価から計量心理学的アプローチといった実験主義的な要素規定を呈したものが見られる^{104)~106)}。また「優れた景観とはいかなる特徴があるのか」という問題設定のもとに、「景観類型の抽出」が80年始めから論じられている【図-5】。これらは景観の価値を浮き彫りにする認識の枠組みを示すと同時に、景観型式の体系化、デザイン・ポキャラーの蓄積に寄与したといえよう。実験心理学的な被験者の認識構造より分類するものが比較的多く^{107)~109)}、記号論的解釈¹⁰⁸⁾、属性別の類型傾向に着目したもの¹⁰⁹⁾も見られる。これに対し、風景の集団表象とする言葉に着目し、社会学的アプローチから意味論的考察を試みたものも見られる¹¹⁰⁾。一方、86年より、景観類型の応用と

も言うべき、優れた空間・景観を創出するための「有効なデザイン手法の提案」を主目的とした研究がなされている【図-5】。これらの研究は従来多く見られた醜悪な景観を回避するという問題意識から、積極的な創出理念の追求に脱却した、より操作的な研究スタンスを採るものである。河川景観を対象に、従来の機能主義、個別環境表現主義に基づく整備の問題点を指摘し、「川らしさ」を取り戻す設計手法の提案^{111)~113)}等が行われている^{114)~117)}。

c) 拡充期

はじめに「景観素材・資源の管理利用」研究が拡充期も継続して行われ【図-6】、環境問題がクローズアップされた90年代前半には、景観に対する生態学的評価が多く論じられている¹¹⁸⁾¹¹⁹⁾。97年には、費用負担問題に着目した農村風景に対する経済学的アプローチも見られ、より実用的な保全のあり方が検討¹²⁰⁾されている。一方、都市化による「自然景観への影響把握」が主に造園学分野において論じられ【図-6】、91年から94年にかけては、里山・集落景観の変容過程や¹²¹⁾、工作物を基調に自然への視覚認識上の影響について検討されている^{122)~124)}。またこれと近似して、絵画、写真等の資料から「植生景観の史的解明」を行った一連の

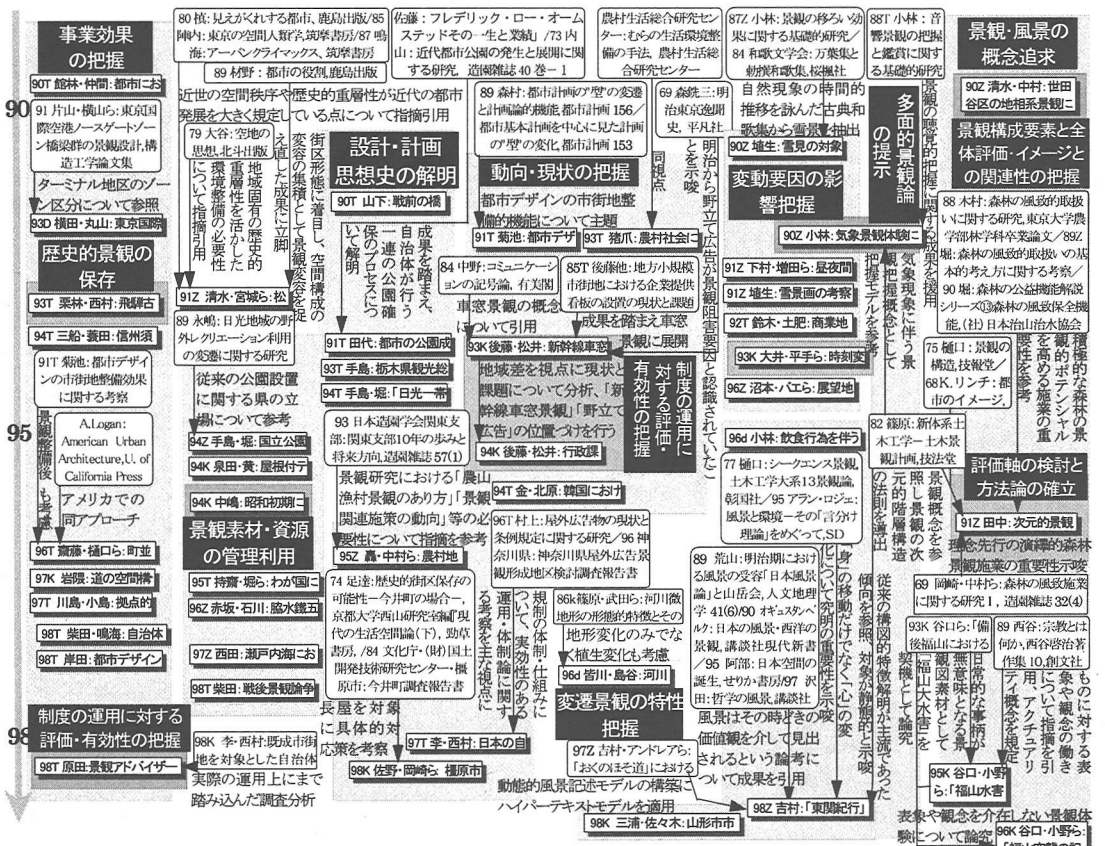


図-7 拡充期 II

研究も見られる^{125)~130)}【図-6】. 次ぎに「歴史的景観の保存」研究も【図-6】、歴史的の継承を踏まえた計画理念を模索したものや¹³¹⁾、シミュレーション像を援用した景観管理計画の提案に、地域住民の景観認識の重要性が指摘されている¹³²⁾. さらに、98年には念念な現状調査から、伝建地区の抱える周辺地域との都市計画上の不整合問題について考察したもの¹³³⁾も見られる。これらの研究の多くには、保存制度そのものの限界性や、経済的価値に対抗し得る文化的価値の具現化が示唆されている。さらに「歴史的な所」の景観特性の把握も【図-6】、名所図会に見られる伝統的水際線形¹³⁴⁾や禅宗寺院の十境¹³⁵⁾を対象としたデザイン論的解明や、中国杭州西湖の風景について考察した研究が95年以降に見られる^{136)~139)}.

一方、近年の景観に関する法制度の拡充を受け、「制度の運用に対する評価・有効性の把握」が主に都市計画分野において発表され、景観保全に対する様々な見解が成果としてあげられている【図-6】. 一律的な建築基準法の規制に対し、自治体と建築行為者の合意形成¹⁴⁰⁾や伝建地区の緩和措置¹⁴¹⁾の重要性、さらに多様な開発主体に対応できる事前協議制度のあり方¹⁴²⁾など、地域の実情に即した独自の法規制が具体的に提

言されている^{143)~145)}. また諸外国の先進的都市における景観保全制度について報告したものが多く見られ、フランスのFUSEAU¹⁴⁶⁾や、イタリアのガラツソ法など^{147)~150)}、ヨーロッパ諸国に事例が集中している。一方「事業効果の把握」を行った研究も数多く見られ、特に97~98年にかけて多い【図-7】. これらの研究の大半は制度研究と同様、都市計画分野で論じられており、景観が都市計画論的位置づけとして議論される考え方が定着したことを示している。特に97, 98年の成果では住民参加の効果を記述したものが多く^{151)~153)}、参加が掲げられている近年の都市計画理念との接点が看取される。

次に、史的考察による「設計・計画思想史の解明」が発展期に続き行われ、公園に関する研究が最も多い【図-7】. 拡充期では設計・計画に携わった技術者を中心とする論考スタイルが出現し、脇水鐵五郎、本多静六といった特定人物の先験的風景観を明らかにしたもののや^{154)~157)}、橋梁設計思潮について文献内容と執筆者の背景、相互関係に着目したもの¹⁵⁸⁾が見られる。さらに「動向・現状の把握」も、拡充期には多く報告され、様々な景観施策のあり方について基礎的資料を呈している【図-7】. また、気象や昼夜などの状況の違いを対象とした景観の「変動要因の影響把握」を目的とし

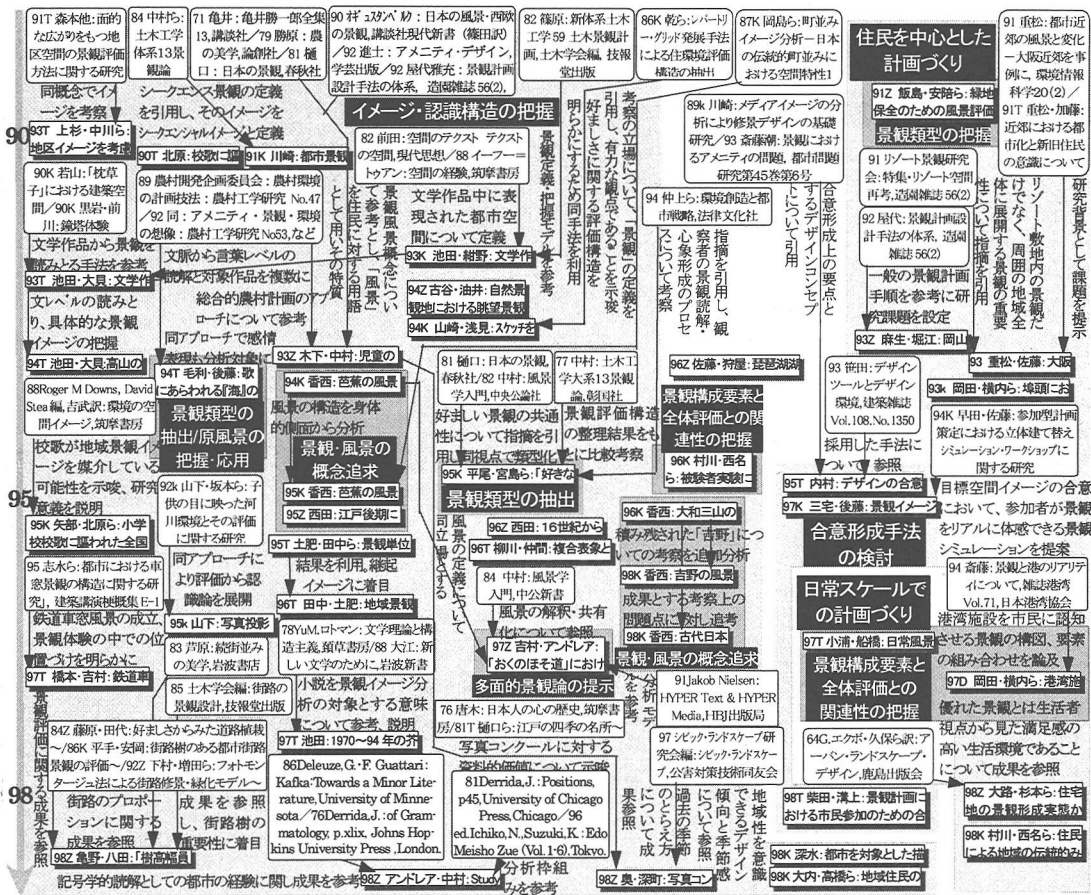


図-8 拡充期 III

た研究^{159)~165)}が90年前半ごろから数多く行われている【図-7】。一方、景観体験の枠組みを拡大解釈した〔多面的景観論の提示〕研究^{166)~170)}も継続して行われ、発展期と同様、五感による景観認識を主張したものや、景観を変容過程として捉える動態的解釈が試みられている【図-7】。さらに、発展期後半には見られなかった〔景観・風景の概念追求〕が再び行われ、地域特性を見定める視点提示や¹⁷¹⁾、哲学的知見を援用した、主観性より脱する景観評価を志向した研究¹⁷²⁾¹⁷³⁾が見られる【図-7】。

次に、発展期中頃より台頭した〔評価軸の検討と方法論の確立〕研究も、拡充期に入り確立したテーマとして成長し、評価軸の多様化を見せる。最も多く評価軸として提案されたものは、景観に対する形態的特性に関するもので、フラクタル解析やフーリエ変換といった数学的理論の応用により形態の計量化を試みている。さらに「好ましさ」や「まとまり」といった評価概念に着目し、その性質や項目について考察したものの¹⁷⁴⁾¹⁷⁵⁾や、逆に視覚的まとまりを欠いた空間の自然発生的な景観秩序の解釈について論じたもの¹⁷⁶⁾も見ら

れる。以上の研究の多くは発展期と同様、定量的手法を用いた客観的基準を提示し、操作論的意義を明確に打ち出している。しかし、これら評価軸の向きは必ずしも同方向とはいえず、様々な景観評価の可能性を担保しているものの、相互の関係性に無自覚な評価手法の提示のみが目的化される危険性に留意すべきである。一方〔原風景・心象風景の把握・応用〕研究も拡充期を通して継続的に行われ、分析の主眼として心象風景の形成・想起要因を解明しようとするものが多い。95年以降では原風景・心象風景を計画目標や景観評価への影響要因として位置づける展開も見られる^{177)~179)}。

次に、前述した多面的景観論と同様、視覚的情報から心的統合現象として議論する〔イメージ・認識構造の把握〕研究が拡充期に入り活発化する【図-8】。特に拡充期では、初動、発展期に多く見られたSD法に対し、テキストを利用したイメージ解析が盛んに行われている。また研究の意義として、個性を重視したマスタープランや住民との意識共有といった、計画上の課題について言及したものも多い^{180)~184)}。作者の主観的表現であるテキストを解釈、客観化することで、地域景

観のアイデンティティ、景観様式の時代性について検討するスタイルが定着したといえよう。一方、住民参加のまちづくりが推奨される都市計画情勢を受け、景観・風景に対する「住民を中心とした計画づくり」についても、拡充期は多く取り上げられている【図-8】。研究の大半が、住民に対する意識調査より対象とする景観要素の認知、認識領域を明らかにする方法を採用し、緑地保全¹⁸⁵⁾¹⁸⁶⁾、リゾート¹⁸⁷⁾、港湾施設整備¹⁸⁸⁾¹⁸⁹⁾など、景観計画の指針として住民の評価構造を把握している。しかし、参加の現場で多く見られるワークショップ等、住民との対話について言及されたものは少なく、近年のまちづくり情勢に即応する成果の蓄積としては未だ発展途上といえよう。一方、こうした参加型計画における関係主体間の多様化を予想し、景観デザインにおける「合意形成手法の検討」がいくつか行われている【図-8】。CGによる臨場的映像¹⁹⁰⁾やCCDカメラを用いた模型¹⁹¹⁾に加え、社会学的知見と多変量解析を援用したデザイナーとのコンセプト共有を論じたものもある¹⁹²⁾。さらに生活者の捉えた「日常スケールでの計画づくり」を目的とした研究も論じられている¹⁹³⁾【図-8】。

また「眺望を確保した計画づくり」を目的とした研究では、都市の高層化、閉塞化を懸念した視点場保護のためのデザインコントロールの重要性がより具体的に指摘されている。特に地域の景観資源として山並みの見え方に着目したものが多く、建築高度規制のあり方が模索されている^{194)~197)}。また、ランドマークや街路の開放性について3次元CGを用いた可視領域の予測モデルより、景観形成計画を支援する方法論的提案も行われている¹⁹⁸⁾¹⁹⁹⁾。

一方、発展期に続き景観設計支援を目的とした操作論的研究は、拡充期にさらなる成果の蓄積を見せる。「有効なデザイン手法の提示」を目的とした研究は、ほぼ拡充期を通して行われ、人間活動を中心とした空間的なまとまり、単位を操作概念として提案する動きが見られる²⁰⁰⁾²⁰¹⁾。また、質の高いデザイン様式の表現媒体として名所図会等の古典的絵画をデータソースとし、その構図的特質を解説する試みも行われている^{202)~206)}。

次に「景観構成要素と全体評価との関連性の把握」も90年前半にかけ多数行われ、従来からの都市、街路といった面的・線的領域が対象景観として比較的多い。都市の研究では、人や車などの動的要素²⁰⁷⁾に加え、個別的操作性の高い建築物ファサード²⁰⁸⁾やプロポーションが及ぼす影響²⁰⁹⁾など、発展期と同様、多変量解析によって評価構造を計量化する実験的アプローチが大半である。一方、街路では、乱雑・整然性についての考察や²¹⁰⁾²¹¹⁾、評価構造の安定した記述方法²¹²⁾について問題提起した研究が見られ、従来多く見られた評価実験結果と街路特性との一様な関係づけに対し、

構成要素自体の影響力が考慮されている。さらに拡充期においては、駅前広場²¹³⁾²¹⁴⁾、大学の囲み空間²¹⁵⁾²¹⁶⁾といった限定的領域の設定や、コンクリート建造物の汚れパターン²¹⁷⁾、熱気球景観²¹⁸⁾といった対象の特殊性も見られ、着眼点の多様化を呈している。また、これら設計を支援する研究と近似して、景観に現れる陰影についてデザイン論的に考察したものや²¹⁹⁾²²⁰⁾、庭園内建築の景観的役割²²¹⁾について明らかにした研究も見られる。

一方「景観類型の抽出」研究では、評価の高い古典的風景画を題材としたテキスト分析を採用したものが多く、ヨーロッパ絵画²²²⁾や浮世絵²²³⁾、水墨画等²²⁴⁾²²⁵⁾、名画に描かれた構図的特質を類型化し景観設計の基本的指針として提示している。また、景観現象の解明を目的とした近似研究として、山岳を対象とした従来からの構図論的アプローチに加え²²⁶⁾、相貌的知覚に留意した形態論的考察も行われている²²⁷⁾。

4. まとめ

本章では、揺籃期から拡充期までの4期の動向を通観し、研究グループ相互の関係性より景観論の変遷について総括的考察と今後の課題について検討する【図-9】。まず、揺籃期から初期に浮上した問題意識として、時代潮流を反映した社会基盤整備の支援志向と、自然環境保護志向の2つの立場性が大枠として抽出される。開発を前提とずる俎上では、どちらも計画論として同一視されるものの、当時の公害問題に代表される都市環境議論²²⁸⁾に立脚すれば、これらは開発と保全という対立図式として捉えることができよう。さらに、住民市民運動に代表される都市計画の混乱とともに、これら2つの問題意識の共通議題として、景観概念が論理化されていった。これより、環境保護思潮を出自とした景観の意味は、設計・計画を前提とした操作論と、開発行為の抑制を念頭においた保守論という、解釈の二重性を持つことになる。

一方、発展期に入り、景観整備を掲げた各種事業活動の隆盛²⁾は、景観研究に対する要請を操作主義的なものとして反映させ、技術者に向けた工学的体系としての編成に研究意義が集中されることとなった。「景観構成要素と全体評価との関連性の把握」や「有効なデザイン手法の提示」が活発化し、「評価軸の検討と方法論の確立」等、景観評価の客観的指標化を目指した方法論的アプローチが、都市計画手法として確立されていった。これにより、前述した解釈の二重性も、操作論的研究の圧倒的な拡大に、保守論的研究が取り込まれていく形で消失していく。

しかし、こうした操作主義的アプローチは設計計画

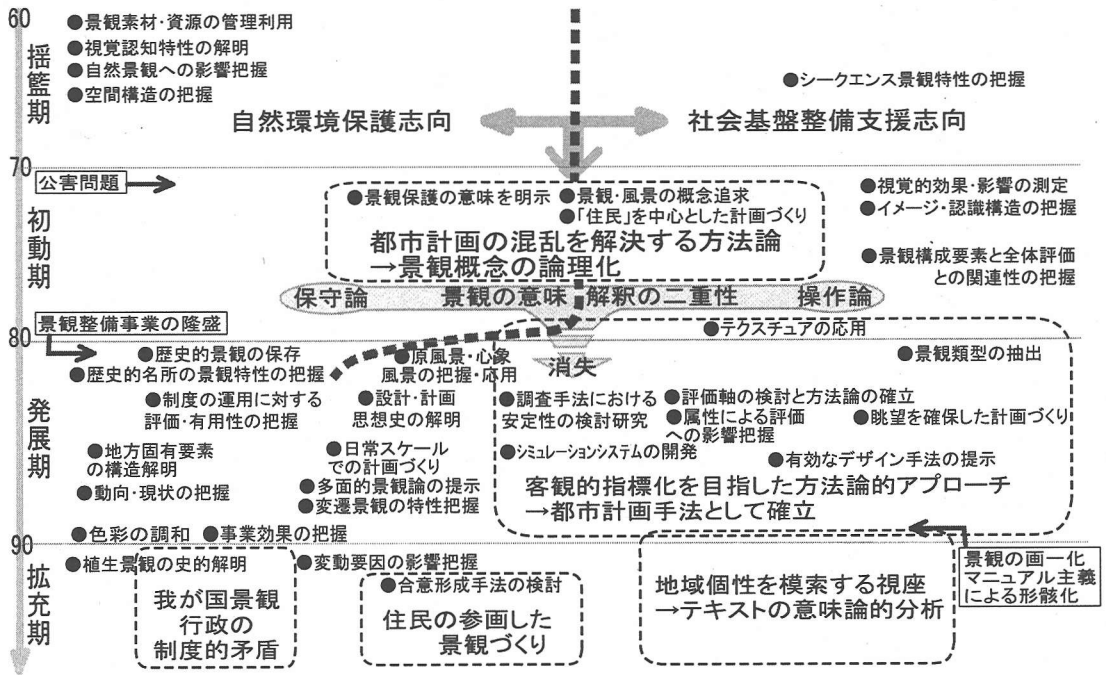


図-9 景観論の変遷

技術の蓄積に大きく貢献した一方で、景観様式の固定化を促すことになる。80年代終わりに危惧された街並みの画一化、マニュアル主義による形骸化²⁾は、地域個性を模索する拡充期の視座として、テキストを分析する意味論的方法を打ち出した。図会、紀行文をデータソースとした[イメージ・認識構造の把握]研究が増加し、[景観類型の抽出]方法も古典的風景画の構図分析へと変移していく。一方、景観事業が盛んになった発展期から拡充期、[制度の運用に対する評価・有用性の把握][事業効果の把握]を目的とした事例研究が増加し、実践に対する資料の蓄積が進んでいる。しかし、神戸市等の都市事例からヨーロッパの保全制度を分析した研究が増加したことや、[歴史的景観の保存]研究に保全制度の限界、経済的政策に振り回される文化的価値の具現化が提起され、我が国の景観行政における制度的矛盾が検討課題として現存している。最後に、景観主体の生活感覚を確認した[「住民」を中心とした計画づくり][日常スケールでの計画づくり]研究が増加し、前述した[事業効果の把握]研究でも住民参加効果が多く採り上げられている。しかし、参加の現場で直面する住民との対話等、実践上の問題との乖離が看取され、研究の独自性確保と意義主張に、時代潮流が形式的に取り込まれていく危険性が指摘される。

ここで、これらの系譜を踏まえた今後の課題について若干の検討を試みる。まず、テキストを利用した意味論的研究についてであるが、これらの研究の大半は、文脈における意味構造の把握を中心としており、作

者によってテキスト上に載せられなかった実際の景観・風景要素との関係性やその位置づけについては明確にされていない。認識されにくい、あるいは取りこぼされた景観要素の価値を顕在化させることも、景観・風景計画の役割として重要といえるのではないか。

次に、景観行政及び施策に対する議論が活発に行われているが、特定街区や総合設計制度等、経済の活性化を狙った形態制限緩和手法の利用が景観の無秩序化、高度化を促している現状も一方に指摘されている²²⁹⁾。開発を中心とした建築・都市計画制度と連動した景観保全制度の導入について、制度運用の実効性を確立する仕組みや専門家の派遣など、より具体的な方法と効果が明確にされなければならない。また景観の地域個性を保守するためにも、全国一律的な問題解決ではなく、求められる地方分権化の制度的方策として議論される必要がある。

最後にこれに関連し、住民参加においても、住民の生活景を問い直す作業が景観行政の実行力増大に繋がることは、昨今の公共政策決定に対する住民意見重視からも明らかといえる。しかし、前述した住民との対話を基盤としない研究スタンスには、住民にとって最も分かりやすい(目に直接訴えかける)という景観の利点、つまり、参加型まちづくりにおける住民の主体的意識の醸成に繋がる効果が表現されにくい。前述した初動期の住民運動を契機とした景観論の展開とその貢献をみても、現在の参加型社会における景観の可能性は大きいといえよう。住民と専門家の相互的な関

係づくりの実現に向け、景観論と参加論を統合させた規範理論の構築が今改めて問われていると考えられる。

参考文献

- 1) 中村良夫: 風景学入門, 中央公論社, pp242-243, 1982.
- 2) 篠原修: 景観研究の系譜と展望—風致工学から景観計画へ, 土木学会論文集470/IV-20, pp35-45, 1993.
- 3) 北原理雄: 「住環境と景観」をテーマとした研究の動向に関する考察—1975~1988—, 都市計画学会論文集24, pp481-486, 1989.
- 4) 熊谷洋一: 景観特集, 造園雑誌50(2), 1986.
- 5) 窪田陽一: 都市景観, 都市計画173, p79, 1992.
- 6) 社団法人日本都市計画学会: 都市計画196, p71, 1995.

巻末付録

表-1 関連文献一覧

ここでは紙面の都合上、出典を以下の通り略記する。なお発表年は西暦の下二桁を記載する。

土木学会論文集=土論, 土木計画学研究論文集=土計
日本建築学会論文報告集(計画系論文報告集)=建論(建計論), ランドスケープ研究(造園雑誌)=ラ研(造雑)

都市計画学会論文集=都論

- 7) 高橋: 景観計画における植物素材に関する研究, 造雑24, pp40, 60
- 8) 北原: 名古屋東部丘陵地域の景観構造, 都論14, pp391, 79
- 9) 石井, 平田: 富士箱根伊豆国立公園箱根地域の景観構成(I), 造雑28, pp24-, 64
- 10) 石井, 和田: 富士箱根伊豆国立公園箱根地域の景観構成(III), 造雑35, pp9-, 71
- 11) 糸賀: 景観研究の系譜(発展期), 景観特集, 造雑50(2), p118
- 12) 伊東: 住景観が住民意識に及ぼす影響(2), 都論8, p13-, 73
- 13) 山田, 後藤, 平沢, 福川: 都市景観のコントロール, 都論8, p171-, 73
- 14) 伊東: 戦後における都市景観運動と最近の新たな動向について, 都論9, 74
- 15) 伊東: 戦後における都市景観運動: その事例分析, 都論10, 75
- 16) 山崎, 佐々木, 種外, 松井: 七感覚手法による風景把握へのアプローチ, 都論10, 75
- 17) 黒田: 正規の視覚認知領域に関する実験的研究, 建論85, p26-, 63
- 18) 黒田: 視覚認知領域に関する実験的研究, 建論86, p28-, 63
- 19) 茶谷, 大野, 諏訪: テクニクの視覚に関する研究I, 建論277, p71-, 79
- 20) 渡辺, 山田, 荒田, 松本: 道路の景観設計, 都論1, p51-, 66
- 21) 安部, 池田: 比叡山延暦寺の空間構成に関する研究(II), 造雑35(2) p15-, 71
- 22) 安部, 池田: 比叡山延暦寺の空間構成に関する研究(III), 造雑35(3) p8-, 71
- 23) 伊東: 都市内高架道路の視覚心理的影響とその要因, 都論7, pp125-, 72
- 24) 榊原, 石井: 橋梁景観の評価に関する一考察, 都論10, p91-, 96, 75
- 25) 谷口, 松本: 住宅地における建築群の空間構成と視覚的效果について, 建論280, p151-, 79
- 26) 谷口, 松本: 住宅地における建築群の空間構成と視空間評価予測に関する研究, 建論281, p129-, 79
- 27) 奥平, 山田, 鳥栖, 松本: 万国博覧会場内の観客流動と視覚構造, 都論2, pp59-64, 67
- 28) 紙野, 三上: 梅田地区地下街における空間把握について, 建論206, p57, 73
- 29) 安藤, 五十嵐: 城郭の視覚的構造に関する研究, 土論266, p107, 77
- 30) 小山田: 都市景観のイメージ調査: 建論212, p59-, 73
- 31) 片山: 都市オープンスペースの基礎的研究, 都論11, pp361-366, 76
- 32) 北村: 街路の景観構成に関する基礎的研究, 都論11, pp169-174, 76
- 33) 吉田: ゴムサットの景観評価について, 造雑46, p141, 83
- 34) 小柳, 岡田, 中村, 窪田: 高速道路の路線選定段階における切土面の発生とその景観的影響の予測手法に関する研究, 土論359/IV-3, p159-, 85
- 35) 安島, 熊谷: 自然風景地内の構造物に対して地形がもつ景観的融和力に関する研究, 造雑48, p228, 85
- 36) 井内, 斎藤, 古谷, 小林: 色彩輝度計による景観測色に関する基礎的研究, 造雑51, p245-, 88
- 37) 西村: 飛騨

- 高山の保存地区画定のための景観構造分析, 都論15, p277-, 80
- 38) 進士, 清水, 武保: 東京都文化財庭園の景観破壊と現況, 造雑52, p43, 89
- 39) 本中: 「平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園」における眺望景観の復原的考察, 造雑44, p203, 81
- 40) 本中: 平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園, 慈光院庭園, 依水園庭園における眺望行為, 造雑46, p25, 83
- 41) 本中: 亀山殿庭園における眺望行為, 造雑47, p25-, 84
- 42) 伊藤: 江戸のまちにみる風土の景観システム, 造雑48, p49-, 85
- 43) 渡辺, 内藤: 名所の形体要素, 都論20, p13-, 85
- 44) 大西, 鳴海, 久, 橋爪: 『浪花百景』に描かれた近世大阪の都市景観構成に関する考察, 都論23, p223-, 88
- 45) 中林: 1980年代における景観・都市美についての計画理念, 都論17, p433-, 82
- 46) 篠原, 天野: 都市高速道路の景観設計思想の比較研究, 土計3, p89-, 86
- 47) 山下: 戦前の丸ノ内地区の景観構成に関する研究, 都論21, p457-, 86
- 48) 山崎: 近世初期京都のモニュメンタルな建築配置による都市景観構成に関する考察, 都論24, p607, 89
- 49) 三輪, 嶋田, 安田: 都市景観形成基本計画の立案と運用に関する研究, 都論17, p505, 82
- 50) 安田, 嶋田, 三輪: 建築デザイン誘導による都市景観形成手法とその評価に関する研究, 都論21, p463, 86
- 51) 安田, 嶋田, 三輪: 都市景観形成手法としての総合設計制度とその評価に関する研究, 都論23, p217, 88
- 52) 浦山, 佐藤: 現状凍結的な規制が農業景観保全に及ぼす影響に関する調査研究, 建計論403, p73-, 89
- 53) 黒瀬, 増田, 下村, 安部: 都市景観形成に係る外壁後退の効果に関する研究, 造雑52, p312-, 89
- 54) 麻生, 雨宮: 水郷地帯における景観整備事業のデザインと人々の評価構造について, 造雑52, p193, 89
- 55) 山崎, 佐々木: 地域風景の固有性把握に関する研究, 都論16, p355-, 81
- 56) 豊間根: 計画における価値の問題, 都論15, p187-, 80
- 57) 中村: 大地の低視点透視像の景観的特質について, 土計1, p1, 84
- 58) 小林: 雨の風景に関する基礎的研究, 都論19, p193-, 84
- 59) 小林: 景観の移ろい効果に関する基礎的研究, 造雑50, p263-, 87
- 60) 小林: 音響景観の把握と鑑賞に関する基礎的研究, 都論23, p439-, 88
- 61) 小林: 雨の景観認識の諸特性に関する研究, 都論24, p433-, 89
- 62) 久保, 上甫木, 安部, 中瀬: 時間経過からみた景観変化に関する研究, 造雑48, p294-, 85
- 63) 吉村, 篠塚, 中村: 商業地の景観に関する動態論的研究, 土計7, p171, 89
- 64) 角, 山本: 居住地の風景保存に関する認知構造, 造雑47, p171-, 84
- 65) 池田: 児童・生徒による身近なまち景観の発見と評価, 都論19, p79-, 84
- 66) 後藤: 地域を持つ「方位観」から捉えた景観秩序形成に関する研究, 都論18, p145-, 83
- 67) 篠原, 屋代: 街路景観のまとまりに及ぼす沿道建物の効果に関する計量心理学的研究, 土論353/IV-2, p131-, 85
- 68) 灰山: 住宅景観の表現性に関する記号論的分析, 建計論355, p32-, 85
- 69) 根本: 住宅地街路景観の緑化計画手法の開発に関する研究, 都論20, p361-, 85
- 70) 久保, 安部, 中瀬, 上甫木, 伊藤, 宮崎: 大都市における緑地景観形成及びオーヘンスペース整備ポテンシャル評価に関する研究, 造雑47, p207, 84
- 71) 平手, 安岡: 街路樹のある都市街路景観の評価に関する研究, 建計論362, p35-, 86
- 72) 志摩, 小柳, 笹谷, 山形: 釣り人とグライダーの環境認識からみた海岸・海中の景観資源, 土計7, p163, 89
- 73) 川崎, 河西, 佐佐木: 言語的メディアイメージの分析による港湾観光地区修景デザインの基礎研究, 土計6, p97-, 88
- 74) 仙田: 原風景によるあそび空間の特性に関する研究, 建論322, p108, 82
- 75) 堀: 体験された風景の構造, 造雑51, p49-, 88
- 76) 岩永, 松本: 都市の心象風景に関する研究, 都論23, p451, 88
- 77) 北原, 近江: 住戸まわりの空間整備と住みつき態度, 都論22, p313, 87
- 78) 久保, 安部, 宮崎, 中瀬: 大都市の日常生活圏における緑地景観形成に関する基礎的考察, 造雑48, p300, 85
- 79) 北原, 桂, 近江: 住戸まわりにおけるSP化と「境界」形態, 都論24, p415-, 89
- 80) 坂本: 民家の家屋配置について, 建論327, p143, 83
- 81) 坂本: 民家・主屋における一番座について, 建論334, p158-, 83
- 82) 坂本, 椿: 平坦地の集落における民家・主屋の向きについて, 建論345, p189-, 84
- 83) 坂本, 椿: 傾斜地および山すそに立地する集落の民家・主屋の向きについて, 建計論

350,p113-85 84)坂本,上和田,椿,郭:民家における門の位置について,建計論352,p101,85 85)坂本,上和田,椿:宅地割の形態について,建計論356,p93-85 86)浅川,鈴木,小林:北海道におけるシボライズされた都市景観要素としての緑地,造雑48,p270-85 87)熊谷:景観予測技法としてのカラービデオシステムの実用化,造雑47,p213-84 88)麻生,鈴木,小林:モデルスコープシステムの実用化と景観の再現性について,造雑49,p173-86 89)斎藤,熊谷:カラーコンピュータグラフィック(CCG)による景観予測手法の開発に関する研究,造雑51,p257-88 90)内田:視覚的障害物としての建築物に関する研究,建論306,p58-81 91)松本,谷口:住宅地における建築群の空間構成の類型化とその視覚的效果,建論316,p99,82 92)熊谷,若谷:自然風景地における垂直構造物の視覚的影響,造雑45,p247-82 93)松本,谷口:住宅地における建築群の空間構成の変化と視覚的效果について,建論346,p143-84 94)山田,篠原,天野,岡田:モニター・ジュによる街路景観の対高架構造物寛容度に関する研究,土計1,p187,84 95)安藤:盛岡城からの岩手山の眺望の確保に関する景観工学的研究,土計1,p203,84 96)斎藤:領域の相互視体験に基づく港まちの景観計画に関する基礎的研究,都論21,p439,86 97)陳:都市河川空間の眺望性及びその利用に関する考察,都論22,p301,87 98)北原,横山,アノセ:都市景観計画のための調査・分析手法に関する考察,都論18,p139-83 99)笹谷:野外実験を用いた地域景観の分類・評価に関する研究,土計2,p101-85 100)斎藤:写真による景観評価特性と既存評価モデルとの関連について,造雑48,p246,85 101)斎藤,古谷,須走:ビデオ画像による景観評価特性について,造雑49,p179-86 102)朝倉,田島:景観提示方法による街路景観評価実験に関する比較研究,都論20,p385-85 103)井内,斎藤,古谷,小林:色彩輝度計による景観測色に関する基礎的研究,造雑51,p245-88 104)大下,渡辺:中心商業地における街路景観の改善方法の研究,都論17,p517-82 105)奥:街路景観構成要素の景観評価への影響,建計論351,p27,85 106)奥:街路景観構成要素と心理的效果との関係,建計論389,p108-88 107)青木,笹谷:筑波研究学園都市の景観の分類と評価に関する研究,都論15,p295,80 108)窪田:街路景観の類型に関する構造分析,都論18,p331,83 109)青柳,楠本:農村居住者からみた農村景観形成課題と修景手法に関する研究,建計論361,p79,86 110)斎藤:海岸景観およびその体験の典型に関する研究,都論20,p391,85 111)篠原,武田,伊藤,岡田:河川微地形の形態的特徴とその河川景観設計への適用,土計4,p197,86 112)伊藤,長谷川,瀬尾,武田:河川風景主義からみた河川活動空間と景観設計方法,土計5,p107,87 113)中村,岡田,古村:河川空間における人の動きの「パターン」の分析とその河川景観設計への適用,土計5,p115-87 114)山下:現歩先行による街路空間の適適性評価実験について,都論22,p283,87 115)金:埋立地上の古庭園に見る景観デザインについて,造雑51(5),p251-88 116)金,中村:景観体験における「詩吟行為」の役割に関する考察,造雑52(5),p205-89 117)増田,下村,安部:都市景観形成に係る街路緑化手法に関する研究,造雑52,p318,89 118)近藤:景観素材としてのアクリソウの生態的特性に関する実験的研究,造雑53,p139,90 119)篠枝,斎藤,武内,池口:生態・景観特性に基づく小笠原諸島鳥島・兄島のランドスケープ評価,造雑56,p199-93 120)秀島,小林:農村風景の保存便益とその費用負担に関する研究,都論32,p397-97 121)神吉,三村:地方小都市近郊農村の市街化に伴う里山・集落景観の変容過程に関する研究,都論26,p139,91 122)油井,古谷,磯野:自然景観地における景観の自然性評価に与える工作物の影響に関する研究,造雑54,p203-91 123)油井,ハエ,古谷,矢部,石田:工作物の眺望距離の変化に伴う自然景観への影響に関する研究,造雑56217,93 124)ハエ,古谷,油井,沼本,児島:自然景観における建築物の位置の変化と景観認識との関係に関する研究,ラ研57,p289-94 125)小椋:「華洛一覽図」の考察を中心にみた文化年間における京都周辺山地の植生景観,造雑53,p37-90 126)

小椋:応挙図の考察からみた江戸中期における京都近郊山地の植生景観,造雑54,p42-91 127)小椋:明治中期における京都近郊山地の植生景観,造雑55,p37-92 128)小椋:明治中期における房総丘陵の植生景観,造雑56,p25-93 129)小椋:明治10年代における関東地方の森林景観ラ研57,p79-94 130)小椋:横浜水道写真帳に見る明治中期の相模川流域の植生景観について,ラ研59,p185-96 131)片山:歴史的都市の都市景観評価と計画手法に関する研究,都論28,p547-93 132)西山,三村:伝統的建造物群保存地区選定後の集落景観の姿容と維持に関する研究,建計論474,p133,95 133)葉,浅野,吉田,戸沼:伝統的建造物群保存地区を核とした歴史的景観の保全・形成のための地区指定の現状と変化に関する研究,建計論506,p111-98 134)上島,篠原:伝統的な水辺の「アース・デザイン」の型と「デザイン」原則に関する研究,土計8,p249-90 135)山崎:禅宗寺院の十境に関する景観論的考察,都論27,p673-92 136)沈,熊谷,下村:中国西湖の景観構成とその形成に関する研究,ラ研58,p157,95 137)沈,熊谷,下村,小野:北京イホ園における景観形成と西湖景観の影響について,ラ研60,p577,97 138)楊,進士:中国杭州「西湖十景」の変遷から見た風景地の成立過程,ラ研60,p465,97 139)沈,熊谷,下村,小野:中国惠州西湖の景観形成と杭州西湖景観が及ぼした影響,ラ研61,p637,98 140)赤崎:指導要綱に基づいた都市景観整備施策における指導と応答について,都論27,p115-92 141)藤崎:歴史的町並み保全と建築規制に関する研究,都論29,p547-94 142)李,西村:既成市街地を対象とした自治体の条例策定による景観コントロール施策の展開,建論504,p147,98 143)八木:伝統的な港町の景観保全計画に関する考察,都論27,p679-92 144)片山,藤澤:歴史的都市の都市景観評価と計画手法に関する研究,都論30,p259,95 145)森本:風景保全のための市街地空間の高さ規制・誘導に関する研究,都論33,p259-98 146)平尾,川崎:「ハリPOS(土地占有計画)」「景観保全のための紡錘体(FUSEAU)」の現状分析,建計論460,p121-94 147)宮脇:イタリにおける景観計画の研究,都論28,p577-93 148)宮脇,西村:イタリにおける景観計画の展開,建論466,p123-94 149)宮脇,西村幸夫:風景計画と歴史的景観コントロールの研究,都論31,p631-96 150)三島:ウーン市の歴史的景観保全制度の展開と市民意識に見るその役割,都論31,p217-96 151)岩隈:道の空間構造からみた農村集落の景観整備に関する研究,建論492,p143,97 152)原田:景観「アドバイザー」制度による景観行政の実態,都論33,p649,98 153)柴田,鳴海:自治体による「景観イベント」の策定状況に関する研究,都論33,p721-98 154)赤坂,石川:脇水鐵五郎の風景論,ラ研59,p13-96 155)西田:瀬戸内海における多島海景の変遷と脇水鐵五郎,田村剛の視覚,ラ研60,p425-97 156)手嶋,堀:「日光一帯の山水風景利用策」(大正3年)における本多静六の風景地計画に関する研究,都論29,p343-94 157)田代:都市の公園成立期における公園の緑と田園風景思潮の関係,都論26,p355-91 158)山下:戦前の橋梁景観設計の思潮に関する研究,都論25,p697-90 159)植生:雪見の対象となる雪の風景に関する基礎的考察,造雑53,p7-90 160)小林:気象景観体験における感覚印象操作の可能性に関する考察,造雑53,p199,90 161)下村,増田,安部,忽那:昼夜間における街路景観の評価構造特性に関する研究,造雑54,p269-91 162)植生:雪景画の考察からみた雪見の対象となる風景の構成手法,造雑54,p48-91 163)鈴木,土肥:商業地区における昼夜間景観変化に関する考察,都論27,p781-92 164)大井,平手,安岡:時刻変化に伴う心理量の変化,建計論453,p45-93 165)沼本,ハエ,古谷,油井:展望地点から観賞する自然景観の景観評価に関する研究,ラ研59,p165-96 166)小林:気象景観体験における感覚印象操作の可能性に関する考察,造雑53,p199,90 167)大井,平手,安岡:時刻変化に伴う心理量の変化,建計論453,p45-93 168)小林:飲食行為を伴う景観体験に関する考察,土計13,p511-96 169)吉村:「東関紀行」の分析を通じた動的風景記述モデルの構築,ラ研61,p675-98

170)三浦,佐々木:山形市市街地における農業用水路の景観と音環境に関する調査研究,建計論513,p61-,98 171)清水,中村:世田谷区の地相系景観に関する研究,造雑53,p205-,90 172)谷口,小野,榊原:「福山水害誌」を契機とした景観について,建計論470,p121-,95 173)谷口,小野,榊原:「福山空襲の記録」などを契機とした景観について,建計論488,p149-,96 174)児島,古谷,油井:自然景観における好ましさを評価構造に関する研究,ラ研58,p177-,95 175)木多,舟橋:都市景観における視覚的「まとまり」に関する研究,都論33,p643,98 176)橋本,工藤:東京・芝浦地区における界限景観の自己組織的生成に関する研究,ラ研61,p663-,98 177)犬飼,松本:心象風景の方向性とその現実の空間形態,都論30,p205-,95 178)澤田,土肥:心象風景が景観の評価構造に及ぼす影響,都論30,p211-,95 179)渡辺,松本,高木:心象風景の形成過程と現実の空間形態,都論31,p175-,96 180)木下,中村:児童の風景描写からみた農村景観への意識化に関する基礎的研究,造雑56,p211-,93 181)池田,大月:高山の地方文学賞受賞作品に書かれた都市景観に関する研究一文レベルの分析を通じて,都論29,p601-,94 182)矢部,北原,徳山:小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究,建計論472,p111-,95 183)池田,大貝:1970~94年の芥川賞受賞作品群にみる自然景観イメージとその変遷,建計論494,p161,97 184)奥,深町,下村:写真コンクールに見る農村景観の季節性認識,ラ研61,p631-,98 185)飯島,安倍,藪茂,趙:緑地保全のための風景評価の方法とその計画化に関する研究,造雑54p209-,91 186)村川,西名,安野:住民による地域の伝統的みどり景観の評価構造に関する研究,建計論509,p77-,98 187)麻生,堀江:岡山県蒜山地域における景観計画と地域住民の景観認識構造について,造雑56,p205-,93 188)岡田,横内,桜井:埠頭における港湾景観のイメージ特性に関する研究,土計11,p145-,93 189)岡田,横内,桜井:港湾施設を市民に認知させる景観のあり方に関する考察,土論555,p61-,97 190)内村:デザインの合意形成手法に関する一考察,都論30,p349-,95 191)三宅,後藤,早田,赤尾:景観イメージの合意形成手法に関する研究,建計論491,p157-,97 192)柴田,溝上:景観計画における市民参加のための合意形成型デザイン手法に関する研究,都論33,p751-,98 193)小浦,船橋,奥,木多:日常風景にみる住宅市街地の環境特性に関する基礎的研究,都論32,p745-,97 194)中林:都心地域からの山なみの見え方についての研究,都論25,p613-,90 195)赤谷,安藤,五十嵐:北上川の流軸景における開運橋からの岩手山の眺望の確保について,都論25,p625-,90 196)永井,笹谷:京都五山送り火の眺望景観と鑑賞に関する研究,都論31,p637-,96 197)片山:歴史的都市における都市景観評価と計画手法に関する研究,都論32,p25-,97 198)磯田,両角,位寄:ランドマークの可視・不可視領域に着目した大規模建築物の影響評価モデルの検討,建計論456,p163-,94 199)篠,佐藤,有馬,キム:可視領域に着目した都市街路の開放性に関する

研究,都論33,p637-,98 200)大山,花岡:農村集落にみる道路空間特性の都市デザインへの応用に関する研究,都論28,p541-,93 201)仲間:眺望景観の分析に基づく空間のつながりに関する考察,都論28,p511-,93 202)坂井,出口,萩島,ハク,菅原:浮世絵風景面の視点場と遠景に描かれた山の仰角に関する分析,都論28,p505,93 203)船,萩島,出口,坂井,趙:広重の浮世絵風景面に描かれた河川景観の構図に関する一考察,建計論482,p155-,96 204)坂井,萩島,出口,船,日高:浮世絵風景面に描かれた宿場の景観構成に関する考察,建計論507,p165-,98 205)橋本,堀:江戸の河岸の空間デザインとその規範に関する研究,都論32,p283-,97 206)橋本,堀:江戸の水辺の樹木・緑地の立地とそのデザイン規範,都論33,p655-,98 207)橋本,土肥:都市景観における動的要素の影響について,都論28,p607-,93 208)山口,屋代:計量心理学的解析手法による商業・業務系建築物前面の景観評価に関する研究,ラ研58,p277-,95 209)稲垣:都市の構図と構成要素がその色彩評価に与える影響,建計論462,p9-,94 210)松本,寺西,仙田:街路景観の乱雑・整然性要因に関する研究,建計論429,p73-,91 211)松本,高井:個人差をふまえた街路景観の乱雑・整然性および魅力度の関連,建計論440,p89-,92 212)楢,乾,中村:街路景観の評価構造の安定性,建計論458,p27-,94 213)志水,鈴木,山口:駅前広場における景観の多様性と好ましさに関する研究,建計論445,p63-,93 214)山口,志水,鈴木:駅前広場における物理的要素の好ましさと全体景観の評価に関する研究,建計論467,p89-,95 215)谷口,宮本,菅野:建築群が構成する囲み空間の物理的特性と視覚的意味について,建計論451,p155-,93 216)宮本,谷口,鈴木:大学キャンパスの囲み空間における物理的属性と視覚的意味に関する研究,建計論466,p75-,94 217)冬川,窪田:コンクリート表面の汚れパターンの視覚的評価に関する実験的研究,土論562,p97-,97 218)小柳,久我,志摩,山形耕一:フォトコンテストの応募写真を用いた熱気球景観の視覚構造分析,土計12,p327-,95 219)川崎,佐佐木:景観に現れる陰影の心理的評価に関する研究,都論25,p691-,90 220)川崎,荒川,堀,梶谷:景観に現れる陰影の意匠性に関する研究,土計9,p213-,91 221)久野,仲間,中村:庭園の眺めにおける建築の景観的役割に関する研究,ラ研58,p153-,95 222)萩島,大貝,金,岩尾,菅原:19世紀ヨーロッパ風景絵画にみる都市景観に関する研究,建計論41,p383-,90 223)坂井,出口,萩島,ハク:広重の浮世絵風景面に見る景観分類に関する研究,建計論461,p165-,94 224)須藤,樋口,玉川:近世以前の水墨画にみる水辺の景観構成について,都論25,p667-,90 225)原田,盛岡:近世の名所図会を題材とした「湾」の景観分析,土計11,p169-,93 226)宮腰:雪形の見える山の景観特性について,都論32,p349-,97 227)横山,齋藤:山岳の形態に関する一考察,都論32,p343-,97 228)石田:日本近代都市計画の百年,自治体研究社,p250-,87 229)西村:歴史的環境保全と景観整備:虚実論から運動論へ,都市計画213,p42,98

(2000. 10. 4 受付)

A STUDY ON THE HISTORICAL CHANGE OF LANDSCAPE RESEARCH IN THE CLASSIFIED FIGURE BY THE PURPOSE

Hisashi SHIBATA and Masato DOHI

The purpose of this article is to clarify the historical change of the issue in landscape researches. We did the review of landscape researches from 1960 to 1998 and showed the classified figure by the purpose. Using these data as a basis, it attempts to grasp their trends and show a perspective for the coming studies. Conclusions are as below: 1. The landscape Concept has been originated in the dichotomies such as Development and protection in the city planning. 2. The problems of studies deal with the text and institution for landscape are grasped. 3. To create the relationship between residents and designer alternation, we suggested about the need of theory integrates landscape with citizen participation.